

日本文学の魅力に迫る

～日本三大随筆を読む 「方丈記・徒然草」編～ 徒然草 5

講 師：現代歌人集会 理事長 林 和清先生

日 時：12月22日（月） 10：00～11：50



■第59段～71段

各段の原文読みと現代訳を交えた解説で現代にあてはまめて
教訓有り、苦笑有りの講義・・・

■第59段は

真理探究の大事の志を発起した人は、捨て去りがたい気がかり
のことも成就しないで、そのままに捨ててしまうべきである。「ちょっとこのことをすまして
おいて、ついでにあのことも片をつけて、あのほうのことも人に笑われないように、将来
の非難が起らぬように準備しておこう、今までだってこうしていたのだから、いまさらこれ
くらいのことを待つのは、今すぐである。あまり人困らせをしないように」などと思ってい
たのでは、よんどころないことがあとからあとから出て来て、そんなことが尽きてしまう日
もなく思い切って実行する日があるものではない。大方の人を見ると、相当な分別のある人
なら、みんなこういう予定だけはして一生を通してしまうものなのである。



近い所の火事などで逃げる人は「もうちょっと」などとい
っているものであろうか。一命を助けたいと思えば、恥じも
なく財産もすて逃げ出すのである。寿命が人を待っていて
くれようか。無情がくるのは水火が攻めるよりも速やかに
逃れる方法ととてもないのに、その時になって、老親幼児、
主君の義、愛人の情けなどがふり捨てがたいからとて、捨
てないですまされことだろうか。

■第71段は

名を聞くと、すぐその人の風貌が想像で
きるような気がするものであるが、会ってみ
ると、それがまた思っていた通りの人とい
うものないものである。昔物語を聞いても
現代の人の家があの辺であろうと感じ、人
物も今の誰のようなどと思いきらべられる
のは、皆そんな気がするものか。また、ど
んな時であったか、現在いま話しているこ
とも、目に見えていることも、自分の心の中
もこの通りのことがいつあったかのか、あ
ったような感じがしていつとは思ひ出さない
が必ずあったような心もちのするのは、自
分だけが、こんなことを感じるのだろうか

